

南原幹雄

謎の団十郎



なぜ だんじゅうろう
謎の団十郎

なんばらみき お
南原幹雄

© Mikio Nanbara 1989



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1989年11月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。 (庫)

ISBN4-06-184566-7

講談社文庫

目次

初代団十郎暗殺事件	7
死絵六枚揃	51
油地獄団十郎殺し	91
長州を破った男	145
伝説歌まくら	223
北国五色墨	259
解説 磯貝勝太郎	292

謎
の
団
十
郎

初代团十郎暗殺事件

狂言は〈二番目〉から〈三番目〉の中入りにさしかかっていた。

市村座の客席はしいんと水を打ったような静けさである。舞台は団十郎と生島新五郎・中川半三郎の三すくみでしのぎをけずり合っている。三者の呼吸は見事に合っている。

台詞と所作による丁々発止の演技がつづいた。そのぴりぴりするような緊迫感が客席につたわって、舞台と客席は一体感につつまれている。

市村座は、昨年（元禄十六年）十一月に火災で燃えおちてしまい、三カ月ぶりの興行である。今年二月初頭に市村座の普請が落成して、それを祝うために〈移徙十二段〉の新作狂言がくまれた。移徙は新築の意味につうずる。仕組は屋島、壇ノ浦の戦いに題材をとっている。

座頭団十郎、立役に生島新五郎、立女方生島大吉の布陣で初日をあげてからというものの、予想どおりの大当りで、客は早朝からつつかけてきた。そして今日で八日めをむかえ、役者も足が板（舞台）になじみだしていた。

団十郎の朗々たる音量が舞台を圧した。団十郎は鞍馬の僧正坊と佐藤嗣信、生島新五郎が佐藤忠信、中川半三郎が牛若の配役である。

新五郎が絶妙の呼吸で団十郎の台詞をうけた。団十郎の顔は紅で隈どられており、新五郎の顔にも筋隈が入っている。

荒事には隈取が必須のものである。これが舞台に効果をあたえ、人物の役柄、性格まで浮き彫りにする。

団十郎は僧正坊の役になりきっていた。中入りを一気にのりきる気魄を内にしずめて、新五郎と応酬をつづけた。

団十郎はのっていた。十四歳で芝居に身を投じ、荒事を創始し、江戸歌舞伎を上方歌舞伎にひけをとらぬ興隆にみちびいて、芸風は円熟の域に一步をふみ入れている。そして今充実しきっていた。

と、このとき、団十郎はあらぬものを見た。

(……?)

なにかの間違いでは、と一瞬自分の目をうたがった。引幕の陰に役者がいた。

(教経……)

衣装と隈取で平教経だとわかったが、舞台の進行とかかわりのない役者である。

団十郎の演技の間が、客席にはわからぬくらいくるった。それが、新五郎の間にも微妙にあらわれた。

(半六、なにを間違えたか……)

団十郎は肚のうちで叱咤した。教経役は生島半六である。教経は手に短刀を持っている。

おや……、と団十郎はいぶかしんだ。教経が短刀を手にする芝居はないからである。瞬間、惑乱におちいった。そして悪寒をおぼえた。

つぎに驚天動地のことがおこった。教経がこちらにむかつて駆けてきた。

客席のざわめきを感じられた。教経が突進してくる。

短刀がぶくひかった。教経はそれをふりかざして、はげしくぶつかってきた。短刀は本身だ。

団十郎は一二歩さがったが、瞬時の差でよけきれなかった。おもい衝撃をうけ、一瞬、視界が暗闇になった。ひくい声をもらして転倒した。

おきあがろうとしたところに、再度短刀がおそいかかってきた。

「半六っ、やめろ！」

夢中で声をあげ、必死に手で制したが、短刀が力まかせにふりおろされた。血しぶきが舞台にとんだ。

激痛と恐怖におそわれ、懸命に逃げようとした。けれども、体がいうことをきかなかった。客席の騒ぎも急速に意識から遠いものになっていった。

——元禄十七年（宝永元年）二月十九日、初代市川団十郎は舞台上に横死をとげた。享年四十五であった。

一

八代目団十郎は、一瞬ためらった。

中村座の楽屋風呂で化粧をおとしてもどつてきたところに、立作者瀬川如皐がひよいと顔を見せた。如皐にはかねて、さがしものをたののである。

が、今朝でがけに母親から相談ごとがあるといわれていた。

如皐との話となれば、ちよつとやそつとではおわらない。木場の家にもどるのは夜更けになるだろう。

「八代目、例のはなしだが」

如皐が声をかけてきた。五尺そこそしかない矮軀で風采はあがらぬが、才能にはめぐまれた男である。

如皐が脚色し、この三月十四日から初演している〈与話情浮名横櫛〉が大当たりしているのも、団十郎の人気だけによるものではなかった。市井写実と男女の心理の妙をこころえた如皐の台本に負うところがかなりあった。

「楽屋じゃあなんだから、〈大八〉の座敷にしよう」

とこたえたとき、団十郎のうちからもうためらいはふつ切れていた。

大八は中村座の楽屋口のならびにある芝居茶屋である。中村座にでているときの団十郎一門は

ほとんどこの茶屋をつかう。

「じゃあ」

といって、如皐はやや猫背で先にでていった。

芝居が閉場^{はな}で客がでていくと、客席は急に墓場のようなしずけさになるが、大当りの余韻は楽屋や道具部屋などにのこっている。その余韻は茶屋にもちこされる。芝居があたれば、茶屋は大繁昌する。不入りだと、茶屋も死んだようになる。

これは茶屋ばかりでなく、猿若町の食べ物屋や土産物屋などもおなじである。

大八の座敷におおされると、如皐と風麿が待っていた。風麿は如皐の弟子で、まだ中村座の見習作者だが、身分は旗本の次男坊である。大柄で、筋骨たくましく、容貌さわやかな若者だ。

「わかったかい、何か」

すわるなり、団十郎はものをねだるかのようにつた。

「^{わたまし}移徙十二段」てえのは、やっぱり幻の狂言ですよ。今まで以上のことと叫びたら、仕組や趣向、配役はおろか台詞の一本だってわかりませんね。絵入^{えいり}狂言本はもちろん、番付だってのこっていないんだから、お手あげですよ」

如皐は初^{はな}っから打ち手が無いといった顔をした。

「幻か……、たしかにそうだ。誰も見たことはないし、台本^{ほん}だって知らないんだからな」

団十郎は相槌^{あいづち}をうった。

「あたるべきところはあらかたあたってみたんですがね。手がかりになるようなものは、切れっ

端もみつかりませんでしたよ」

「一度この世から消されちゃった狂言だから、その正体をさぐるのはむつかしいだろうな」

団十郎は落胆の言葉をもらしつつも、暗い表情は見せなかった。まだ、さぐっていく方法はのこっているはずだという期待をいだいているからだ。

「初代の追善にはもってこいの狂言ですがねえ、仕組の輪郭くらいはわからねえと」

「まだ月日には余裕がある。あきらめないで、もうひと踏んばりあたってみようじゃないか。おれもこころあたりをさぐってみよう」

「わたしもあきらめちゃおりません。きっとどこかに手がかりくらいはのこってるとおもいますよ」

「〈移徙十二段〉をなんとしても、もう一度生きかえらせてやりたい。それには、初代の百五十回忌追善狂言として日の目を見せてやるのがいちばんいいような気がするんだ」

「そりゃあ、それ以上の時宜じぎといつてはないでしょう。そのときをのがしたら、わたしや八代目が生きているうちにいい機会かりなんてめぐってこないでしょう」

今年が初代市川団十郎の百五十回忌にあたる。以前から団十郎は、横死をとげた初代の追善興行をおもいたち、それにもっともふさわしい狂言として〈移徙十二段〉をかんがえていた。

初代団十郎がどうして一座の役者生島半六にころされたか、その動機はわからぬままになっている。と同時に狂言の内容がほとんどつたわっていない。

元禄期ごろまでの狂言は座頭が中心になって口立くちだてでつくられたので、台本というものはなかつ

た。そして口から口へつたえられた。そうでないものは当時^{はんこう}版行された絵入狂言本や番付、役者評判記によって仕組や配役などを知るほかはないのである。

《移徙十二段》は天下未曾有の不祥事をおこした狂言としてその後上演されなかったため、口から口へつたわることはおろか、絵入狂言本としてもつくられなかったと想像することができた。わずかにその内容をつたえるものとして団十郎横死の翌年出版された《宝永忠信物語》と享保期の末にだされた《金の揮^ぎ》があるだけだった。この中にいくらか仕組と配役についてふれているところがあった。

それで団十郎は如臈に《移徙十二段》についての資料を極力さがさせ、その台本をあらたにくるよう依頼してあったのだ。如臈は知り合いの版本屋、地本問屋などに手をまわし、番付類や役者評判記をもとめて弟子の風麿をあるきまわらせていたのである。

団十郎も自分の家に代々つたわってきた資料や書簡、文書をひっくりかえしてさがしたが、見つからなかった。彼は百五十回忌を機に、家の先祖であり、江戸歌舞伎の最大功績者として初代を顕彰し、功績を記念しておきたかったのである。

「おれも、こころあたりを虱^{しらみ}つぶしにしてみよう」

「とことんやってみましょう」

「追善興行は、盆か秋をかんがえてるんだが」

盆興行か秋興行ということである。団十郎はすでにそこまでかんがえていた。

団十郎は今年は中村座の座頭である。彼がたって主張すれば、座元^{ざもと}も帳元^{ちやうもと}も大抵のことはいや